
トンサワン語の文法概略

— 形態音韻論と名詞句を中心に —

内海 敦子*

トンサワン (Tonsawang) 語はインドネシアのスラウェシ島北部州で話されている言語である。トンサワン語は記述が十分でなく、文法についても未知の領域が多いが、消滅の危機に瀕しており、記述が急務である。本論文では著者の集めた資料を基に、トンサワン語の音韻論、形態音韻論、代名詞、名詞マーカ―の基本的な事項について記述する。

1. 概論：地理と言語の系統

トンサワン語はインドネシアのスラウェシ島、北部スラウェシ州で話されている少数民族言語の一つである。話者数は1万人前後と推定されるが (Noorduyn, 1991)、活発にトンサワン語を使いこなせるのは1940年代までに生まれている者がほとんどである。1980年代生まれ以降はほぼトンサワン語を話すことができず、受動的な話者 (passive speaker) と呼ばれる、祖父母が話すのを聞いて理解できるが話すことはできないといった程度の言語能力である。トンサワン語が話されている地域は主に Kabupaten Minahasa Tenggara (東南ミナハサ) で、一番中心的な街は Tombatu の街である。この地域の人口統計には他民族の居住者も含まれるし、中年以下の世代は活発な話者ではないので、実際の話者数は数千人程度であろう。2020年代前半の現在、1980年代から1990年代生まれの者が現役の子育て世代であり、トンサワン語を伝えることができないため、今世紀半ばにはほぼ消滅することが予測される。

トンサワン語は、ミナハサ諸語 (Minahasan languages) と呼ばれる系統的に一番近い5つの言語から成るグループに属する (Sneddon, 1978)。他の四言語は Tondano, Tonsea, Tombulu, Tontemboan である。ミナハサ諸語は近隣の Ponosanakan, Mongondow, Sangir, Ratahan, Bantik, Talaud といった諸言語と共にフィリピン諸語に分類される (Blust, 2013)。フィリピン諸語は西マラヨ・ポリネシア諸語、さらにオーストロネシア語族に分類される。

本論で取り扱うデータは Brickell 2016 からの自然発話のデータ、および著者本人が2013年から2015年に採録した主に聞き取り調査によるデータである。調査協力者はトンサワン語とインドネシア語マナド方言の二言語併用者で、生年は1937年から1956年の男女7人である。

2. トンサワン語の音韻論

トンサワン語の音韻は母音が /i, e, a, o, u, ə/ の六つ、子音が /p, b, t, d, k, g, ʔ, s, x, h, ɟ, n, m, ŋ (ng), r, l, y, w/ の十八である。さらに /ɣ/ がインドネシア語からの借用語によく現れる。子音のクラスターは (1) 後続の子音と同器調音の鼻音+阻害音の子音、(2) 声門破裂音 /ʔ/ + 破裂音・鼻音である。(1) のクラスターは語頭と語中に現れ、(2) は語中にもみ現れる。語例は Brickell 2018a, Brickell 2018b 採録のものから引用した。(2) は、preglottalization と見ることもできるので、更なる音声学のおよび音韻論的研究が必要である。

表1：トンサワン語の子音のクラスター

	(1) 鼻音+阻害音	(2) 声門破裂音+破裂音・鼻音
語頭	<i>mbaʔel</i> サゴの粉 <i>ndoʔoŋ</i> 居住区 <i>ŋahit</i> いかだ <i>nsalimata</i> レモングラス	*
語中	<i>sambei</i> ロープ <i>kindet</i> 仲間意識 <i>gongor</i> 音を立てる <i>tonsawan</i> トンサワン	<i>taʔpiya</i> 意地悪な <i>koʔko</i> にわとり <i>doʔna</i> 可能を表す助動詞 <i>suʔsu</i> 探り出す

音節構造は (CC) V (C) である。CVC および CV の音節が多く見られる。語尾に来ることができる子音は /h/ と /ʔ/ を除くすべての子音（無声破裂音、有声破裂音、鼻音、無声摩擦音のうち /s, x/）である。

形態音韻論的に重要な要素は、接頭辞ないし proclitic が付加した時にいくつかの破裂音が摩擦音・近接音・震え音 (trill) などに交替する現象である。本論文ではこの現象を「音声の弱化 (softening)」と呼ぶ。具体的には /b, p/ が /w/、/d/ が /r/、/k/ が /h/ に交替する（ただし /t/ と /g/ にはこのような交替は見られない）。表2に語例を示した。また、/ə/ で始まる patient voice の接尾辞 -ən が /ʔ/ で終わる動詞の後に付加するとき、直前の音節の母音と同化することがある。enclitic の -əm については、母音で終わる語基に付加するときに /ə/ が脱落することがある。表3にまとめた。

表2：トンサワン語の形態音韻論的交替

	接頭辞なし	接頭辞あり
破裂音→摩擦音・近接音・震え音の交替	<i>patuy</i> 注ぐ <i>baleʔ</i> 家 <i>dua</i> 2 (数詞) <i>kou</i> 2sg (二人称単数の代名詞)	<i>i-watuy</i> 注ぐ、conveyance voice <i>maha = waleʔ</i> すべての家 <i>sangawulu bo-rua</i> 10 と 2 (12) <i>si-hou</i> 名詞マーカー + 2sg

表3: トンサワン語 /ə/ を含む接尾辞・enclitic における /ə/ の母音との交替・脱落

	語尾が /ə/ で終わる動詞	それ以外
patient voice の接尾辞 -ən	<i>tihəʔ</i> 知る + -ən <i>tihəʔ-on</i>	<i>kapet</i> + のぼる + -ən <i>k-əpet-ən</i> <i>loboh</i> + 搦く + -ən <i>loboh-ən</i>
enclitic の -əm の変化	<i>lukuʔ</i> 飲む + -əm <i>i-lukuʔ=um</i> <i>tiroʔ</i> 急ぐ + -əm <i>ma-tiroʔ=om</i> <i>deso</i> 動く + -əm <i>d-um-eso-m</i>	<i>ma-</i> 戻る = 完了 <i>ma-leng=əm</i>

/n/ で終わる接尾辞が後続の要素によって変化することがある。Locative voice の接尾辞 -ən の /n/ は一人称単数の代名詞 clitic が後続するときに /i/ に変化する。(1) a がその例である。(1) b のように固有名詞が名詞マーカ-の *i-* を伴い後続するときは接尾辞末の /n/ は現れている。

上でも挙げた patient voice の接尾辞 -ən の /n/ は一人称単数の clitic である = *ku* が後続するときは (2) a のように脱落するが、(2) b のようにその他の代名詞や固有名詞・普通名詞が後続する場合は脱落しない。

- (1) a. *k-in-əpet-ai* = *ku*
PST-climb-LV = 1sg 'I climbed'
- b. *k-in-əpet-an i-ani*
PST-climb-LV NM-Annie 'Annie climbed'
- (2) a. *porog-ə* = *ku*
cut-PV = 1sg 'I will cut (it)'
- b. *porog-ən i-hita*
cut-PV NM-1pl.INC 'We will cut (it)'

3. トンサワン語の代名詞

3.1 代名詞の体系

代名詞の体系は表4に記したように、独立形と接続形がある。

単数の代名詞の接続形は一音節ないし二音節で、enclitic としての特徴が強い。複数の代名詞の接続形は二音節から四音節で、直前に名詞マーカ-の *i-* を伴うため、enclitic より語の性格が強い。

/k/ で始まる代名詞に名詞マーカ-が付加すると音声の弱化が起こり /h/ と交替することがある。西マラヨ・ポリネシア諸語によく見られるように、一人称複数には除外形 (exclusive) と包括形 (inclusive) がある。複数形の代名詞のほとんどは *tahula* という要素で終わるが、一人称複数の包括形だけには付加しない。本論では *tahula* を複数の接辞としては扱わず、その前の要素と一体のものとして扱う。

文頭に代名詞が置かれるときは、基本的に動詞の主語として現れる。このとき、名詞マー

カーの *si-* が単数の代名詞に付加するが、複数を表す代名詞には付加しない。文頭に他の要素（多くの場合は時に関する名詞か actor voice の動詞）が置かれ、文中で二番目の要素として代名詞が現れるときは、名詞マーカ―が付加しない独立形の形をとる。/k/ で始まる独立形の代名詞は、二番目の要素として現れるとき、直前の要素が母音で終わるときのみ語頭の /k/ が /h/ に交替することが多いが、/k/ のままでも現れうる。直前の要素が子音で終わっている時は /k/ のままである。

接続形は名詞ないし undergoer voice の動詞に後続する形である。単数の代名詞の接続形には独立形と異なる形態が認められるが、複数の代名詞の接続形には名詞マーカ―の *i-* が付加するのみである。ただし、/k/ で始まる代名詞に関しては /k/ が /h/ に交替する。これらの形態が現れる環境は例 (3) から (5) に示した。

表4：トンサワン語の代名詞の体系

	代名詞が文頭に來るときの形 単数の代名詞：名詞マーカ― + 独立形 複数の代名詞：独立形のみ	独立形（主に文中の二番 目の要素として現れる）	接続形（所有者として名詞 に後続、および undergoer voice の行為者として動詞 に後続）
1sg	<i>si-ahu</i>	<i>ahu</i>	= <i>ku</i> , =
2sg	<i>si-hou</i>	<i>kou/hou</i>	= <i>hou</i> = <i>kou</i> （語尾が ^s /n, ŋ/ の単 語に後続するとき）
3sg	<i>si-sia</i>	<i>sia</i>	= <i>sia</i> , = <i>na</i>
1pl.EXC	<i>kamitahula</i>	<i>kamitahula/hamitahula</i>	<i>i-hamitahula</i>
1pl.INC	<i>kita</i>	<i>kita/hita</i>	<i>i-hita</i>
2pl	<i>komotahula</i>	<i>komotahula/homotahula</i>	<i>i-homotahula</i>
3pl	<i>silatahula</i>	<i>silatahula</i>	<i>i-latahula</i>

- (3) a. *sando* *ahu* *k-um-an* *se?e*
 tomorrow 1sg AV-eat banana
 ‘I will eat banana tomorrow’ 独立形が時を表す名詞の後に現れる
- b. *k-um-an* *ahu* *se?e*
 AV-eat 1sg banana
 ‘I will eat banana’ 独立形が actor voice の動詞の後に現れる
- c. *si-ahu* *k-um-an* *se?e*
 NMSI-1sg AV-eat banana
 ‘I will eat banana’ 名詞マーカ― + 独立形が文頭に現れる
- d. *bata? = ku* *beat = ku*
 child = 1sg pleasure = 1sg
 ‘My child is my pleasure’ 被所有物を表す名詞の後に接続形が現れる

- e. *daʔgiŋ porog-ə = ku*
 meat cut-PV = 1sg
 ‘I will cut meat’ 動詞の undergoer voice に後続するとき接続形が現れる
- (4) a. *sando kita/hita m-iaha i-keʔdoŋ*
 tomorrow 1pl.INC AV-babysit NM.I-child
 ‘We will babysit a child tomorrow’
 語頭が /k/ のまま、ないし語頭の /k/ が /h/ に交替した独立形が母音で終わる時を表す名詞の後に現れる
- b. *k-um-əpet kita a-saʔkoŋ*
 AV-climb 1pl LOC-stairs
 ‘We climb stairs’ 語頭が /k/ の独立形が子音で終わる actor voice の動詞の後に現れる
- b. *kita m-iaha i-keʔdoŋ*
 1pl AV-babysit NM.I-child
 ‘We will babysit a child tomorrow’ /k/ が語頭の独立形が文頭に現れる
- c. *ŋilu i-hita motis*
 nose NM.GEN-1pl sharp
 ‘We have long noses’ 被所有物を表す名詞の後に接続形が現れる
- d. *daʔgiŋ porog-ən i-hita*
 meat cut-PV NM.I-1pl
 ‘We will cut the meat’ undergoer voice の動詞の後に接続形が現れる
- (5) a. *sando komotahula/homotahula m-iaha i-keʔdoŋ*
 tomorrow 2pl AV-babysit NM.I-child
 ‘You guys will take care of the child’
 語頭の /k/ がそのまま、ないし語頭の /k/ が /h/ に交替した独立形が母音で終わる時を表す名詞の後に現れる
- b. *kandoan komotahula m-iaha i-keʔdoŋ*
 day.after.tomorrow 2pl AV-babysit NM.I-child
 ‘You guys will take care of the child’
 子音で終わる時を表す名詞の後に /k/ が語頭の独立形が現れる
- c. *komotahula m-iaha i-keʔdoŋ*
 2pl AV-babysit NM.I-child
 ‘You guys will take care of the child’ /k/ が語頭の独立形が文頭に現れる
- d. *daʔgiŋ porog-ən i-homotahula*
 meat cut-PV NM.I-2pl
 ‘You guys will cut the meat’ undergoer voice の動詞の後に接続形が現れる

3.2 所有者を表す代名詞の形態音韻論的变化

トンサワン語の代名詞が被所有物を表す名詞に後続して所有者を表す場合、他の場合には

見られない形態音韻論的变化を見せることがある。複数の代名詞に関してはすべて名詞マーカーの *i* が付加した形で現れるため、直前の名詞がどの音で終わっても同じ形態のままである。

単数の代名詞に関しては、一人称は =*ku* と =*hu* と =*ʔu*、二人称は =*u* と =*nu*、三人称は =*a* と =*na* が直前に来る被所有物を表す語の最後の音によって交替する。一人称は直前の名詞が母音で終わるときは =*hu*、直前の名詞が /*n*/ で終わるときは =*ʔu*、その他は =*ku* として現れる。ただし、直前の名詞が /*n*/ と /*ŋ*/ で終わるときは、その /*n*, *ŋ*/ の音が脱落し、 =*ku* が付加する。二人称と三人称は直前の名詞が /*n*/ と /*ŋ*/ で終わるときのみ、 =*u* と =*a* で現れるが、その他の場合は =*nu* と =*na* で現れる。これらの代名詞の形態については (6) に示した。

表5：所有者を表す代名詞接続形の形態音韻論的变化

	直前の名詞が母音で終わるとき	直前の名詞が / <i>n</i> / / <i>ŋ</i> / で終わるとき	直前の名詞が / <i>n</i> / / <i>ŋ</i> / 以外の子音で終わるとき
1sg	= <i>hu</i>	= <i>ku</i> (直前の名詞の / <i>ŋ</i> / は脱落する) = <i>ʔu</i> (直前の名詞が / <i>n</i> / で終わるとき)	= <i>ku</i>
2sg	= <i>nu</i>	= <i>u</i>	= <i>nu</i>
3sg	= <i>na</i>	= <i>a</i>	= <i>na</i>
1pl.EXC	<i>i-hamitahula</i>	<i>i-hamitahula</i>	<i>i-hamitahula</i>
1pl.INC	<i>i-hita</i>	<i>i-hita</i>	<i>i-hita</i>
2pl	<i>i-homotahula</i>	<i>i-homotahula</i>	<i>i-homotahula</i>
3pl	<i>i-latahula</i>	<i>i-latahula</i>	<i>i-latahula</i>

(6) a. *bale* 家 母音で終わる語に後続するとき

bale = *hu* *bale* = *nu* *bale* = *na*

house = 1sg house = 2sg house = 3sg

bale i-hamitahula *bale i-hita* *bale i-homotahula*

house NM.1.1pl.EXC house NM.1.1pl.INC house NM.1.2pl

bale i-ilatahula

house NM.1.3pl

b. *latay* 服 直前の名詞が /*ŋ*/ で終わる場合

lataʔ = *ku* *latay* = *u* *latay* = *a*

clothe = 1sg clothe = 2sg clothe = 3sg

lataʔ i-hamitahula *latay i-hita* *latay i-homotahula*

clothe NM.1.1pl.EXC clothe NM.1.1pl.INC clothe NM.1.2pl

latay i-latahula

clothe NM.1.3pl

- c. *bələn* 目 直前の名詞が /n/ で終わる場合
bələʔ = ku *bələn = u* *bələn = a*
 eye = 1sg eye = 2sg eye = 3sg
bələn i-hamitahula *bələn i-hita* *bələn i-homotahula*
 eye NM.1.1pl.EXC eye NM.1.1pl.INC eye NM.1.2pl
bələn i-latahula
 eye NM.1.3pl
- d. *bibir* 唇 直前の名詞が /n//ŋ/ 以外の子音で終わる場合
bibir = ku *bibir = nu* *bibir = na*
 lips = 1sg lips = 2sg lips = 3sg
bibir i-hamitahula *bibir i-hita* *bibir i-homotahula*
 lips NM.1.1pl.EXC lips NM.1.1pl.INC lips NM.1.2pl
bibir i-latahula
 lips NM.1.3pl
- e. *lueʔ* 涙 直前の名詞が /n//ŋ/ 以外の子音で終わる場合
lueʔ = ku *lueʔ = nu* *lueʔ = na*
 tear = 1sg tear = 2sg tear = 3sg
lueʔ i-hamitahula *lueʔ i-hita* *lueʔ i-homotahula*
 tears NM.1.1pl.EXC tears NM.1.1pl.INC tears NM.1.2pl
lueʔ i-latahula
 tears NM.1.3pl

4. トンサワン語の名詞に付加するマーカー

4.1 動詞句との関わりで付加される名詞句マーカー

フィリピン諸語の名詞マーカー (noun marker) は限定詞 (determiner) と呼ばれたり格標識 (case marker) と呼ばれたりすることがあるが、トンサワン語をはじめとする北部スラウェシ州の言語について言えば、限定詞や格標識という名称はそぐわない。ヨーロッパ諸語で限定詞と呼ばれているものは定・不定あるいは特定・不特定を表すことがあるが、北部スラウェシ州の名詞マーカーにはそのような機能はない。また格としては少なくとも主格・対格・属格が意味的には区別されるが、それだけの格を区別する数のマーカーはない。そのもそもマーカーによっては単数の名詞には付くが複数の名詞には付かないものがあり、格標識としての機能が十分に果たされていない。従って本論文では名詞マーカーという名称を使用することにする。

名詞に付加する接頭辞ないし proclitic は、*si-*、*i-*、*a/an-/am-* の三種類のようなものである。このうち本節では動詞句に関わる名詞句マーカーと、主に名詞句に関わり前置詞的な働きをしたり linker としての機能を持つ名詞句マーカーを分けて説明する。

まず、動詞句に関わる名詞マーカーは二種類である。一つは名詞マーカー *si-*、もう一つは名詞マーカー *i-* である。名詞マーカー *si-* の分布は限定的で機能も明確であるが、名詞マ

ーカ-*i*の分布はより広くて機能を明確に記述することは難しい。本論文では名詞マーカ-*si*のグロスをNMSI、名詞マーカ-*i*をグロスではNMIとする。名詞マーカ-*si*は主語の機能を果たす名詞句に付加することが多く、名詞マーカ-*i*はundergoer voiceの文中で行為者の標識として用いられることが多いが問題となる現象も見受けられるので、ここでは一つの名詞マーカ-に特定の機能を紐づけする呼び方を避ける。また名詞と名詞をつなぐlinkerとしての働きをする*i*という要素があるが、こちらは次節で記述する。

表5にまとめた通り、接頭辞*si*は単数の人を表す代名詞・名詞にしか付加しない。例文(7) aと(7) bの対比から分かるように、actor voiceの主語として文中に現れる単数の代名詞の場合、文頭に来ない場合には*si*に対応する音素は付加されない(3.1節と表4を参照)。しかし、例文(8) aと(8) bの対比から分かるように、固有名詞・普通名詞であれば文頭に来ない場合にも付加する。この点が、代名詞と名詞の違いである。また、undergoer voiceの文中において、主語としての機能を果たす、行為の対象を表す名詞が動詞の前に置かれる場合は、接頭辞*si*が付加する。例文(9) bの*pitər* 'Peter'は、ここではundergoer voiceの主語であり、行為の対象となるが、接頭辞*si*が付加している。

接頭辞*si*は単純に主格のマーカ-とは言えない。なぜなら、人を表す固有名詞がactor voiceの文中で行為の対象となる場合、接頭辞*si*が付加するからである。例文(9) aではactor voiceの行為の対象の固有名詞*pitər*には接頭辞*si*が付加している。

接頭辞*si*と異なり、接頭辞*i*は名詞が果たす機能により、義務的に付加しなければならない要素である。位置は必ず名詞ないし動詞(句)の直後である。

トンサワン語のundergoer voiceの節においては説明が複雑となる。動詞(句)の直後に置かれる場合、undergoer voiceの行為者を表す名詞句には必ず接頭辞*i*が付加する。例(9) bに見られるようにundergoer voiceの行為者である*ami*には接頭辞*i*が付加している。例(10)の*mama* 'mother'も同様で、動詞句の直後に置かれ接頭辞*i*が付加されている。このようにundergoer voiceの行為者に関しては動詞句の直後に置かれるという位置にも、付加する接頭辞にも例外がない。

しかし、undergoer voiceの主語として機能する、行為の対象を表す名詞句は、文頭に置かれるときには例(9) bの*pitər*のように接頭辞*si*が付加される。ところが、同じく主語(行為の対象を表す名詞句)がundergoer voiceの動詞句の後ろに置かれる場合は例(9) cの*pitər*のように接頭辞*i*が付加される。つまり、undergoer voiceの主語であり行為の対象を表す名詞句は、動詞句の前に置かれるか後ろに置かれるかによって接頭辞が異なるのである。

上記の点から、トンサワン語の名詞マーカ-は格標識であるとは単純には言えない。同じ文法的機能を果たす名詞句(ほとんどの場合主語)が位置によって異なる名詞マーカ-を取るからである。また、異なる文法的機能を果たす名詞句であっても、同じ名詞マーカ-を取ることがある。

一つの可能性としては接頭辞*si*の異形態が*i*であり、undergoer voiceの動詞句の後に置かれる主語名詞句に付加するときは異形態の*i*が現れるなどと説明することが考えられる。しかし、これは異形態とした場合の*i*と同じ形態の別の機能の名詞マーカ-があるため、混乱を招く。

明確に言えることは動詞の態、および動詞句と名詞句の位置関係が名詞マーカの選択に影響を与えるということである。また、語順が比較的自由なのは主語と動詞句の間の位置関係と、時を表す名詞句とその他の要素との間の位置関係だけである。active voice における行為の対象を表す名詞は必ず動詞に後置される。同様に、undergoer voice における行為者を表す名詞は必ず動詞の直後に来なければならない。

表6：トンサワン語において動詞句とのかかわりで現れる名詞マーカとその分布

	名詞マーカ-SI- (actor marker)	名詞マーカ-I- (genitive marker)
分布と機能	(1) actor voice の行為者、名詞文の主題を表す名詞句に付加する。 代名詞には文頭に置かれた場合のみ付加する。固有名詞・普通名詞には文頭でも文中でも付加する。 (2) undergoer voice の主語として機能する、行為の対象を表す名詞句が、undergoer voice の動詞句の前に置かれる場合、代名詞・固有名詞・普通名詞に付加する。 (3) actor voice の動作の対象が、単数の人を表す固有名詞・普通名詞の場合に付加する。	(1) undergoer voice の行為者を表す名詞に付加する (2) undergoer voice の主語を表す名詞が動詞の後に現れるときに付加する。 (3) actor voice において行為の対象を表す無生の名詞に付加することがある（動詞による）。 (4) 名詞と名詞をつなぐ linker として現れる a. 被所有物の後に置かれる所有者を表す名詞の前に現れる b. 複数の名詞が名詞句を形成するとき
人間を表す単数の名詞と単数の代名詞	si-	i-
上記以外（人間を表す複数の名詞・代名詞と、人間以外を表す名詞）	NA	i-

- (7) a. *si-hou* *alakapui l-um-olos* *an-oto*
 NM.SI-2sg soon AV-descend LOC-car
 ‘You will soon descend from the car’ (Actor Voice)
 文頭の actor の代名詞に接頭辞 *si-* が付加する
- b. *alakapui* *hou* *l-um-olos* *an-oto*
 soon 2sg AV-descend LOC-car
 ‘You will soon descend from the car’ (Actor Voice)
 文中の actor の代名詞に接頭辞 *si-* が付加しない

- (8) a. *si-pitər* *alakapui l-um-olos* *an-oto*
 NM.SI-Peter soon AV-descend LOC-car
 ‘Peter will soon descend from the car’ (Actor Voice)
 文頭の actor の固有名詞に接頭辞 *si-* が付加
- b. *alakapui* *si-pitər* *l-um-olos* *an-oto*
 soon NM.SI-Peter AV-descend LOC-car
 ‘Peter will soon descend from the car’ (Actor Voice)
 文中の actor の固有名詞にも接頭辞 *si-* が付加
- (9) a. *si-ani* *i-t-um-uluŋ* *si-pitər*
 NM.SI-Annie PST-AV-help NM.SI-Peter (Actor Voice)
 “Annie helped Peter”
 actor voice の行為者である固有名詞の *ani* ‘Annie’ にも、行為の対象である *piter* ‘Peter’ にも、接頭辞 *si-* が付加する
- b. *si-pitər* *t-in-uluŋ* *i-ani*
 NM.SI-Peter PST-help NMI-Annie (Patient Voice)
 “Peter was helped by Annie”
 undergoer voice の行為者である固有名詞の *ani* ‘Annie’ は動詞の直後に置かれて接頭辞 *i-* が付加される。行為の対象であり、undergoer voice の主語として機能する *piter* ‘Peter’ は文頭に現れ、接頭辞 *si-* が付加する
- c. *t-in-uluŋ* *i-ani* *i-pitər*
 PST-help NMI-Annie NMI-Peter (Patient Voice)
 “Peter was helped by Annie”
 undergoer voice の行為者である固有名詞の *ani* ‘Annie’ は動詞の直後に置かれて接頭辞 *i-* が付加される。行為の対象であり、undergoer voice の主語として機能する *pitər* ‘Peter’ が動詞句の後に置かれるときは、接頭辞 *si-* でなく、接頭辞 *i-* が付加する
- (10) *uaʔi tuax* *patuy-an* *i-mama = hu*
 water sago.palm pour-LV NMI-mother = GEN.lsg
 ‘Palm wine will be poured by my mother’
 undergoer voice の直後に置かれる actor の名詞句に接頭辞 *i-* が付加

その他、場所格 (locative) の名詞に前置される名詞マーカー *a-* がある。これも必ず場所を表す名詞の前に置かれる必要があるが、多くの場合、動詞句との関わりで現れる。*a-* と *an-* と *am-* の条件異音が存在し、/b/ で始まる名詞の前には *am-*、その他子音で始まる名詞の前には *a-*、母音で始まる名詞の前には *an-* が置かれる。例文 (7) の *oto* ‘car’ の前には *an-* が来ている。以下のグロスでは NM.LOC で示す。

名詞マーカー *a-* は locative voice の主語になりうる場所を表す名詞句が、actor voice の文中に現れるときに付加される。(11) a の actor voice の文中に現れる場所を表す名詞句 *saʔkong* ‘stairs’ は名詞句マーカー *a-* が必要である。(11) b のように動詞が locative voice に

なると、*saʔkong* 'stairs' は主語となり、文頭に置かれ、名詞句マーカ―は付加しないが、主語となる名詞は特定性が必要なので、通常は (11) b のように指示代名詞が後続する。

- (11) a. *k-um-əpet = ahu* *a* *saʔkong*
 AV-climb = 1sg LOC stairs
 b. *saʔkong i-ana* *kapetai = ku*
 stairs LINK-that climb = 1sg
 'I climb up the stairs'

名詞句が *bale* のように /b/ で始まる場合は (12) のように *am-* となる。

- (12) *si-ahu* *m-utun am-bale* *i-aʔi*
 NM.SI-1sg AV-live NM.LOC-house LINK-this
 'I live in this house'

4.2 名詞と名詞をつなぐ linker *i-*

i- という要素には名詞と名詞を結ぶ linker としての役割があり、フィリピン諸語に一般に見られる linker と非常によく似ている。*i-* の後に来る名詞が /b/ で始まる場合は (11) の *im-bene* 'NM.I-woman' に見られるように *im-* に交替するが、その他の音素に関しては調査がなされておらず不明である。このような交替は 4.1 で記述した名詞マーカ―には見られないため、linker の *i-* と名詞マーカ―の *i-* は異なる要素と考えてよいだろう。

まず linker としての *i-* について説明する。(13) の *matua i-tuama* 'parent LINK-man' と *matua im-bene* 'parent LINK -woman' のように、被所有物の後に所有者が来るときに接頭辞 *i-* が所有者を表す名詞の前に付加される。また、(14) や (15) に見られるように、名詞に指示詞が後続するとき、指示詞の前に接頭辞 *i-* が現れる。これらの機能はフィリピン諸語の linker と共通している。

- (13) *matua i-tuama s-um-aʔaj = əm* *a* *matua im-bene*
 parent NM.I-man AV-propose = COMP LOC parent NM.I-woman
 '(It is Tonsawang custom that) The parents of a man propose the marriage to the parents of a woman'
- (14) *meya i-aʔi* *seʔe i-aʔi*
 table LINK-this banana LINK-this
 'this table' 'this banana'
- meya i-aho* *seʔe i-aho*
 table LINK-that banana LINK-that
 'that table' 'that banana'
- keʔdoŋ i-aʔi* *keʔdoŋ i-aho*
 child LINK-this child LINK-that
 'this child' 'that child'

(15)	<i>keʔdoŋ</i>	<i>i-boho</i>	<i>seʔe</i>	<i>i-boho</i>
	child	LINK-here	banana	LINK-here
	'child (who is) here'		'banana (which is) here'	
	<i>meya</i>	<i>i-waʔaho</i>	<i>seʔe</i>	<i>i-waʔaho</i>
	table	LINK-over.there	banana	LINK-over.there
	'that table over there'		'that banana over there'	

なお、指示代名詞のうち、*aho* 'that' が名詞に前置されるときは linker は例 (16) に見られるように必要ない。

(16)	<i>aho</i>	<i>heʔdoŋ/keʔdoŋ</i>	<i>aho</i>	<i>meya</i>
	that	child	that	desk
	'that child'		'that desk'	

同じく指示代名詞のうち「これ」を意味する要素は *iaʔi* であるが、これが名詞に前置されると *waʔi* となり、linker は例 (17) に見られるように必要ない。

(17)	<i>waʔi</i>	<i>poman</i>	<i>waʔi</i>	<i>seʔe</i>
	this	field	this	banana
	'this field (for cultivation)'		'this banana'	

5. まとめ

本論文ではトンサワン語の基本的な音韻論、形態音韻論と名詞に関わる文法記述を試みた。トンサワン語はフィリピン諸語の常として、動詞の態の交替が文法記述の中心となるが、動詞については後の稿にゆずる。

略号

1sg	一人称単数	1pl	一人称複数
2sg	二人称単数	2pl	二人称複数
3sg	三人称単数	3sg	三人称複数
AV	actor voice	COMP	completive
CV	conveyance voice	GEN	genitive
EXC	exclusive	I	the noun marker i-
INC	inclusive	LINK	linker
LOC	locative	LV	locative voice
NM	noun marker		
PST	past tense	PV	patient voice
SI	the noun marker si-		

参考文献

- Blust, R.A. 2013. *The Austronesian languages*. Revised edition. Canberra: Pacific Linguistics.
- Brickell, Timothy C. 2016b. *Tonsawang: a collaborative multimedia project documenting an endangered language of North Sulawesi*. London: SOAS, Endangered Languages Archive. <https://elar.soas.ac.uk/Collection/MPII035088> (accessed 2018-12-02)
- Brickell, T.C. 2018a. Reduplication in Tondano and Tonsawang. *NUSA: Linguistic studies of languages in and around Indonesia*. Vol. 65 p. 81-107.
- Brickell, T.C. 2018b. Tonsawang (Toundanow), North Sulawesi, Indonesia—Language Contexts. In: P. K. Austin, ed. *Language Documentation and Description* [Online]. London: EL Publishing, pp. 55-85. Available from: <http://www.elpublishing.org/PID/169>.
- Hayes, Rebekah. 2019. A Morphosyntactic description of verbal constructions in Tonsawang, an endangered language of northern Sulawesi.
- Noorduyn, J. (1991) *A critical survey of studies on the languages of Sulawesi*. Leiden: KITLV Press.
- Sneddon, James Neil. 1978. *Proto-Minahasan: Phonology, Morphology and Word List*. Canberra: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, The Australian National University.